

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 63 号

平成 19 年 7 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

金田福一「日々の糧 365 日」より（2）

3 月 4 日

主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。（詩篇 37・7）

主のしもべはみ言に従うべきです。聖書の教えに忠実に服従すべきです。「赦せ」と、主は言われますから、誰をも赦すべきです。自分に対して、どんな損害を与えた人をも、憎んではいけません。赦さなければなりません。相手に対する非難と、赦せないことについての弁解は、いつでも、自己義認に過ぎません。しかし、赦し得ない自分の罪に気づいて悔い改めるならば、主は赦してくださり、赦せる人にと、変えて下さるでしょう。また、「争ってはいけない」と、主は言われますから、主のしもべが争ってははいけません（テモテ 2・24）。そのような、一足一足の実践こそ、主に従う者の道なのです。

3月6日

牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、……苦しめられている人々を思いやりなさい。

(ヘブル 13・3)

私たちの心は、傷つけられることには敏感に、人を傷つけることには鈍感にできています。はずかしめを受けて憤る時、相手が平然としているのを見るならば、私たちの心はいっそう怒りに燃えるでしょう。反対に、相手をはずかしめるつもりはなくて、不注意に口にした言葉によって、相手が傷ついたのを感じても、私たちは、自分の不注意や、思いやりのなさを反省しなで、相手に対して、軽蔑感を抱くことがあります。私たちの社会生活は、そのような対人関係の連続であると言えます。相手のことを思いやる心、しかも、謙虚な暖かさがなければ、人を愛することはできないのです。

3月11日

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」

……私はその罪人のかしらです。(テモテ 1・15)

謙虚さとは、おのれの価値の自信の上に立って頭を下げるしぐさではありません。それなら、選挙前の立候補者の演技と一緒です。真の謙虚さとは、おのれの罪と無価値とを痛感する者の、その真実にすぎません。他よりもおのれを高しとし、他よりもおのれを愛し、おのれを批判するものを拒否する、おのれのその冷たさを知って驚く人は、謙虚な人なのです。また、みずからの罪の刑罰と裁きとを、神からも人からも、進んで受けようとする人は、謙虚な人なのです。そのような謙虚さから、実は、何者をも恐れぬ真理の断言と、決断とが、生れてくるものなのです。「神はへりくだるものに恵みを与えられる」

3月12日

人がわたしのうちにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。

(ヨハネ 15・5)

イエスさまと共に居なさい。イエスさまのそばに居なさい。離れてはいけません。教会には、聖霊の恵みが満ちています。「離れてはいけない」という努力さえ、必要ではありません。いつも感謝することや、寛容であることや、人を赦すことは、あなたの努力ではありません。イエスさまのそばにおりさえすれば、イエスさまのお力が、あなたをそのような人に変えなされるのです。イエスさまのみ言を、絶えず聞いていれば、あなたの人柄が、イエスさまに似てきます。イエスさまは、あなたの魂だけでなく、心のそこを、言葉遣いを、行動を、み心にかなう者に、変えようとしておられるのです。

3月17日

主は私たちが卑しめられたとき、私たちを御心に留められた。その恵みはとこしえまで。(詩篇 136・23)

主のご臨在を確信できるようになるためには、どうしたらいいのでしょうか。主は、あなたの前におられるのですから、主のみ顔を仰いで、「主よ、感謝します」と口に出して言うことを、習慣にきなさい。人に聞こえないように、できるはずです。職場でも、家庭でも、実行きなさい。心がトゲトゲしくなったとき、イライラしてきた時、気が沈む時、罪と戦う時、「主よ、感謝します」と言いなさい。主の前に居ないかのように、また、めったに感謝などしないような、そんな習慣を身につけてどうするのですか。それよりも、いつも主の前にいて、何ごとでも感謝する習慣を、身につけるべきではありませんか。

(注)小西芳之助先生の教えによれば、「わが主イエスよ」と呼ぶことを、習慣にきなさい、ということになります。

3月19日

イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、言われた。「...キリストは、苦しみを受けて三日目に死人の中からよみがえる。」(ルカ 24・45,46)

主が共に居て下さると、「信じる」ことを、努力している人がいます。信じようとして、努力してみるのですが、どうしても、信じることができません。長続きがしないのです。そうです、努力ではないのです。努力でないとしたら、どうしたらいいでしょう。私たちが「する」のでなく、神様が「して下さる」のですから、それを、お受けしたらいいのです。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」と、主は言われました(マタイ 28・20)。努力をやめなさい。しかし、主はあなたと共に居て下さると、あなたの心を、今開きなさい。

3月23日

私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(ヨハネ1・7)

主を宿せる友よ。私たちはもはや、憎しみに顔を曇らせるような、この世の民ではありません。私たちを憎み、ののしり、故なく非難する人があったとしても、その人と決して争う必要はありません。そんなことはなかったかのように、愛と、平和と、やさしさをもって、進んで対応できることは、あなたの力によるものではありません。昨日まで、どんなに不快な記憶があったとしても、そのような過去の出来事に眼を向けないで、キリストにある友として、新しき交わりの手を差しのべることこそ、私たちのなすべきことです。その手を何度払いのけられようと、屈せぬ愛情に生きられることは、天の賜物なのです。

3月24日

あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。

だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。

(ルカ 22・32)

誰かが私たちの心を傷つけるようなことを言ったとしても、そんなことを、その人が言わなかったかのように、また、そんなことは、聞かなかったかのように、尊敬と愛とを失わないで、その人と交わるべきです。自分の正当性を弁護しようとして争うことは、主に栄光を帰することになりません。私は、このようにして、友を失わなかった記憶を持っておりますが、それはすべて、主の恵みであったのです。私たちの、数知れぬ不信と裏切りの行為にもかかわらず、それらを無視して、私たちを信じて下さった、主の御信頼と愛こそ、私たちが人を信じていく、不屈の信頼の源泉なのです。

3月26日

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

(ピリピ 1・21)

生きていることに、何の疑いもない日々は、あまり不満のない日々であると言えます。生きていることの意味が分らないという時は、現実の出来事が、自分にとって不満であるからです。神を求めるといっても、生きがいの探求であると言えます。しかし、ある人は、ある時から、その生きる姿勢とコースが違ってきます。自分を中心にした「なぜ？」という疑問を、口にしなくなります。現実の問題は、自分にとっての意味が大切なのではなく、神にとって意味があると知ったからです。シナリオも見たことのない端役の通行人から、いつか、神の歴史のステージで、シナリオを手に、重要な役割りを果たす人間にと、変えられていくのです。

3月27日

「労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を支払ってやりなさい。」

(マタイ20・8)

自分のしたことについて、自慢をしてはいけません。なしえない人を、悪く言ってはいけません。自分のなし得ないことについて、しなくともいいと言ってはいけません。なし得る人を、そしてはいけません。「弱い人に目を注ぐ」などと言う人は、たいてい強い人です。また、自分の弱さについて、甘えてもいけません。キリスト者をランナーにたとえるならば、ひとりひとり、スピードが違います。同じ日にスタートしても、みんなばらばらです。中には、やっぱりスタートに立っている人もいます。しかし、イエスさまは、毎日、みんなをお集めになります。そして、罪を赦して下さるのです。

4月4日

聖霊によるのでなければ、誰も、「イエスは主です。」とすることはできません。(コリント12・3)

聖霊経験の意義は、異常な体験そのものにあるものではありません。むしろ、生けるキリストを「信じる者」とされた、その飛躍にあります。人間のわざによる飛躍ではありません。「信じる者」と、飛躍させて下さる、その神の愛の力が、聖霊なのです。なぜ、聖霊経験は必要なのでしょう。聖霊の働きによらなければ、飛躍も、解放も、自由もないからです。そして、そこには、聖霊経験を持っていないことに対する、自己弁護があるのみです。また、誤てる聖霊経験は、誇りとなり、傲慢となるでしょう。人間の、深き傲慢を示し、そして、打ち砕いて、謙遜にするものこそ、真の聖霊経験なのです。砕かれた魂にのみ、キリストは御内住なさるからです。

4月14日

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇 37.5）

まじめになろうとすること、キリスト者になろうとすることを、信仰だと思っている人が多いようですが、信仰とは、キリストと、その福音とを信じることなのです。生けるキリストのみわざに、身も魂もゆだねてしまうことが、信仰なのです。私たちの側の働きは、停止すべきです。しかし、停止せよとか、無用であるとか言われると、たちまち不満や疑いをお持ちになる人があると思います。自分の力や働きを、やめろとか、いらぬとか言われることに対して、最後まで抵抗することこそ、人間の罪性なのです。そんな私たちが、生けるキリストに、全くゆだねることができるようになったということは、ふしぎなみ霊のお働きによるのです。

4月15日

街道や垣根のところにでかけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。

（ルカ 14・23）

最大の親切は、あなたの友を礼拝に誘うことです。この世的に、どんなに親しい交わりをしても、その友の魂の救いのために手を貸してあげないなら、決して親切とは言えません。その友が、あなたの信仰をだめにするような遊びに誘うなら、そういう交わり方は、きっぱりと断りなさい。礼拝に行かないで遊んでいる時、主があなたのことを、どんなに悲しんでおられるか。あなたは分かりませんか。滅びの道に、誘ってもいけないし、誘われてもいけません。あなたの友が遊びに誘うとき、むしろ、礼拝に誘いなさい。それが、あなたの友に対する、最大の愛のわざです。友よ、目をさましなさい。

4月24日

キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と讃美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。

(コロサイ 3・16)

礼拝を守るということは、キリスト者の自慰行為ではありません。信仰の実践の第一歩であり、信仰のあかしの第一歩であり、神への服従の第一歩なのです。礼拝を守らないならば、信仰の成長もなく、人格と生活の潔めもあり得ません。礼拝を守ることによって、み言を聞き、み言に養われ、潔められていくのです。あなたは、家庭において、やさしさを失ってはいけません。主に仕えるように、家庭に仕えるべきです。しかし、礼拝を守ることににおいては、妥協してはいけません。子供を連れてでも、説教が十分に聞けなくとも、礼拝を守りなさい。主は、あなたのために、いのちを捨てて下さったからです。

4月27日

何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。

(ピリピ2・3)

なぜ、人を尊敬することができないのでしょうか。それは、自分の罪深さが分っていないからです。人間の義は、いつでも、他に対する比較や批判として働くのです。他を批判しようとすることは、人間の義の性質です。自分の罪深さに気づかない人は、この義で立っていますから、謙遜にもなれないし、人を尊敬することもできないし、他から学ぶこともできないのです。真の謙遜は、目的を持った動作ではなく、自分の罪深さを知った者の、自然の姿に他なりません。人を尊敬することは、愛することよりも大切です。優越的な愛や、高慢な憐憫の愛が何になりましょう。むしろ、尊敬こそ、真の愛なのです。

4月29日

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目覚めていても、眠っていても、主とともに生きるためです。

(テサロニケ 5・10)

あなたは今、困っていますか。生活に疲れていますか。あなたの心は、つらい気持ちや悲しみで、一杯ではありませんか。しかし、イエスさまは、あなたのそばに居て下さいます。あなたに、生活の秘訣をお教えしましょう。イエスさまにだけ目を注いで、今の、眼の前の、一つ一つの仕事を、感謝して実行しなさい。明日のことを考える必要はありません。イエスさまは、あなたをこわさないように、大切に抱いて、一日一日、生きていくことに耐えさせて下さいます。あなたは、苦しみによって消耗されることはありません。苦しみによって、成長していきます。今日の、一瞬一瞬を、主と共に生きなさい。

4月30日

私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。

(コリント ・4)

人生には、思いがけない悲しい出来事や、苦しみや、悩みが、訪れてくることがあります。人間の言葉では、とうてい慰められないような悲しみを抱いている人もあります。そういうことに会って、人は神を求め、教会に来るのです。キリストのもとに来た人のみが、慰めを得るのです。生きていくためには、神からの慰めが必要です。キリストのもとに来て慰められた人は、悲しみの中から立ち上がって、隣人に眼を向けるのです。自分だけが不幸だと思っていた人の眼に、多くの不幸な人の姿が映るようになり、自分に与えられた神の慰めを、その人に届けようとする人にと、変えられていくのです。

5月4日

あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子供です。（ガラテヤ 3・26）

イエスさまを、あなたの心と、家庭の中にお迎えしなさい。イエスさまはあなたを、神の子に変えて下さいます。神の子たちは、まだこの世に居ても、もうみ国に居るかのよう、「主よ、感謝します」と何でも感謝してお受けしますから、その心はいつも平安なのです。イエスさまは主でいまして、すべてのことを支配して下さり、何が起きようと、主のみ旨でないことは、一つもありません。だから、平安と感謝なのです。あなたには、なぜ平安がなかったのですか。イエス様が主ではなく、あなたが主で、病気のことも、医者のこと、家庭のことも、気に入らないことばかりだったのと違いますか。神の子に、変えていただきなさい。

（注）小西先生の教えによれば、「わが主イエスよ」と呼んで、感謝して受けることになります。

5月8日

「さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また包んでくださるからだ。」

（ホセア 6.1）

イエスさまのところに来たら、みんな救われるのです。そして、大切なことは、自分が分るようになるということです。自分が罪人として分るのです。腹を立てていたことが分ります。高ぶっていたことが分ります。悲しんでいたことが分かります。レントゲンで写されるように、イエスさまから来る聖霊の光に照らされて、自分の真相を教えられた時から、人は、いやされていくのです。照らされたその全身に、十字架の愛が浸透するからです。誰でも、イエスさまのところ、来なければなりません。また、絶えず、イエスさまのところ、立ち返らなければなりません。そして、日々、いやされ、潔められるのです。